

兒教育の事務上の監督者、幼兒教育の思想上の獎勵者、そういふ人々の資格には必ずしも此の三條件が絶對の必要ではないかも知れないが、併し實際に幼兒に接して、直接に其の教育の任に當る人には、之れが何よりも缺くべからざる資格である。資格などいふ究屈な言葉を用ゐないでも、之れなくして保母になることは其の人の苦痛であつて、之れあつて保母になる時、其の人は最幸福な人なのである。

但し、斯ういふ心を持つて居るだけで、保母の

任務が完全に盡し得るといふ譯ではない。それは保母の素養も要る。保母の練習も要る。保母の經驗も要る。併しそれは保母のハタラクに屬する要件である。いくら此方の條件が具つても其の人が保母になれる人柄でないならば、矢張りほんとうの保母にはなれないのである。即ち之れを保母の第一資格と名づけた譯である。以下保母の第二資格第三資格と順々に考へを續けてゆかなければならない。

英文學にあらはれたる子供 (五)

『トム』と『マギー』(上)

東京女子高等師範學校教授 岡 田 み つ

「トム」と「マギー」は「ザヨウ・シ・ハリオット」(George Elliot)の件 The Mill on the Floss と云ふ小説中の主人公たる子供で「トム」は兄で十三歳「マギー」は八歳の妹である。

「トム」の歸省——兄妹の對話——喧嘩——マギーの苦痛——仲直り——魚釣

「まあさん僕の衣囊ポッケットに何が入つて居るか分らないでせう。」と「トム」は密かに「マギー」を座敷の片

隅に引き寄せて頭を合頭かせながら「マギー」の好奇心を唆ろうとしてゐる。

「エー、何だか脹れてゐるのネ、兄さん。石弾？ 榛子？」と尋ねながらも「マギー」の心は少し失望した。石弾や榛子で遊ぶと常も自分が下手なので「トム」に詰らない／＼と云はれるから。

「石弾？ ウーン！ 着弾なんか小さい子と皆交換して仕舞つた。榛子だつて實が青い時分でなけりや面白くないではないか。馬鹿だナー。コラ之。」と云つて「トム」は右手の衣囊から何物かを半ば引出して見せる。

「何？ 黄色い處が少し見えるぎりなの」と「マギー」は小聲で囁く。

「あのネーあのー新しいー推量で御覽よーまあさん。」

「當てられないワ。」と自烈たさうに「マギー」が云ふ。

「癩癩を起すならいや。それでは教へて上げな

い。」と「トム」は衣囊に手を差し入れて決心の體を示す。

「ヨー兄さん」と衣囊の中に強直張つてゐる「トム」の腕に絶つて切願るやうに「私怒りはしないの。たゞ當てられないからなのよ。ヨー兄さん愛しくして頂戴よ。」

「トム」は徐々と腕を弛めて、

「そんならソラ新しい釣糸なのさ。二本あるの。一本はまあさんので自分一人限で持つてよいのだよ。之を買はうと思つてね、學校で皆が出し合ひで御菓子を買ふ時にも、仲間に入らなかつたものだから、「ギブソン」や「スパウンサー」なんか怒つて僕と喧嘩をしたよ。之が釣鉤でね御覽……あのネ明日丸池へ釣に行きませう。まあさん自分で御魚を釣るのだよ。餌を付けたら何かしていでせう。」

「マギー」はその返答に「トム」の首へかちり付いて物も云はずに自分の頬を「トム」の頬へ押しあてる

のであつた。「トム」は釣糸をそろり／＼解しながら暫らくして、

ト「僕は善い兄さんでせう。まあさん一人限りで使ふ釣糸を買つて上げたりして……僕厭なら買つて上げなくともいゝのですものネ」

マ「エー真に／＼善い兄さんヨ。私兄さん大好ん。」

「トム」は釣糸を衣囊に仕舞つて、釣鉤を一つ／＼見てゐたが、やがて、

ト「僕が御菓子の仲間入を爲ないので、皆が僕に反抗つて來たつけ。」

マ「いやね。學校で皆が喧嘩をしないとよいのに。兄さん怪我を爲なかつて。」

ト「怪我なんかするものか。」といつて今度は鉤を片付けて、大きな小刀を取り出した。一番大きい刃をそろり／＼開けて、指端で刃を撫でながら熟々と見て、「トム」は又云ひ出した。

ト「僕は「スバウンサー」の目の處へ必然痣を作ら

へてやつたと思ふ。僕を撲ろうなんと思つた罰だ。僕は撲られるのが恐いつて、出し合ひななぞに加はるもんか。」

マ「兄さんは強いね。「サムソン」見たやうよ。若し獅子が出て來て私に吠え掛れば兄さんは其の獅子と闘ふでせう。ネー兄さん。」

ト「どうして獅子がまあさんに吠えかゝるの。馬鹿だナ。獅子なんか見世物でなくては居もしないのに。」

マ「エー然うだけれど。まあ獅子の居る國に居たら——あの暖い「アフリカ」だつたらと云ふのよ。「アフリカ」では獅子が人を食ふのですよ。本で讀んだから、其の本を見せて上げてもいいの。」

ト「そうしたら、鐵砲を持つて來て打止めるだけだ。」

マ「だつて、もし鐵砲が無かつたら？二人でそんな事を考へないで、戶外へ出るかも知れないで

せう。釣りに行く時のやうに。而して其處へ大きな獅子が吠えながら走つて来てね、而して私達は逃げる事が出来なかつたら、兄さん其時はどうして、」

「トム」は黙つて居た。而して結局馬鹿らしいといふやうに、

ト「だつて獅子が来もしないのに、そんな事いつて何になるの」と云ひながら、歩み去らうとする。

マ「でも、其時はどんなだらうと思ふのよ。兄さんまあどうするでせう。」と「マギー」は「トム」の後をつけて行く。

ト「五月蠅い。まあさん。何て馬鹿なの。——僕は兎を見に行かう。」

「マギー」の胸は心配でドキ／＼して来た。預かつた兎が死んだと事實を直ぐ「トム」に知らせる勇氣もなく、ビク／＼しながら黙つて「トム」の後に歩を運んだ。而して心の中では、兄の怒りと嘆き

を和げるには、何といつて話したらよかろうと案じ煩つて居た。「マギー」は何よりも「トム」の怒りを恐れるので、「トム」の怒りは自分の腹立とは趣を異にして居たからである。

マ「兄さん」と戸外に出てから「マギー」はオツオツ云ひ出した。「あの兎を幾何で御買ひになつて。」

ト「ニクラウス」と六「ベンス」と明白と「トム」が答へる。

マ「二階の私の御金入の中には、其よりかもつと入つてゐるやうだから、御母さんにそ云つて、兄さんに上げて頂くから。」

ト「何だつて？僕はまあさんの御金なんか要らないよ。馬鹿！僕はまあさんよりも澤山持つてゐる。男だもの！「クリスマス」の時にだつて、僕は金貨をいつでも貰ふ。其は今に一人前の男になるからなので、まあさんは女だから銀貨しか貰はないのだ」

マ「エー、だけれど、兄さん！若し御母さんが、

私の御金入から二「クラウン」と「六ペンス」を出して兄さんの御小遣に上げていゝと仰つて、而して兄さんが其でもつて兎を買へば。」

ト「もつと兎を？あの上要るものか。」

マ「でも兄さん、皆死んで仕舞つたの。」

「トム」は、ハタと歩を止めて、「マギー」の方を向き直つた。

ト「御前が餌をやるのを忘れたのだね。而して「ハリー」(召使つてゐる男)も忘れたのだ。」と云ふと共に「トム」の顔に紅がサと汐して、又其が直ぐに退いて仕舞つた。「ハリー」に打掛つてやろう！放逐してもらつてやる！僕はマギさん大嫌ひだ！もう明日釣に連れて行かない。僕は毎日兎を行つて見て呉れといつたのにと。「トム」は歩を續ける。

マ「エー、でも私忘れたの。ついなのよ。眞實に兄さん、堪忍して頂戴な。」と「マギー」ははや涙

が瀧と流れる。

ト「まあさんは不良い子だ！釣糸なんか買つて上げて惜しい事をした。僕はまあさん嫌ひ」と「トム」は手痛く云ひ放つた。

マ「兄さん非道いわ」と嗚咽しながら「兄さんが何か忘れても、私は勘辨するのに！兄さんが何かしたつて、私はちつとも構やしない。勘辨しやつぱり、兄さんを好いて上げるのに。」

ト「だから馬鹿なのだ！僕は決して物事を忘ればしない——僕は忘れやしない。」

マ「勘忍して頂戴ヨ。兄さん！胸が裂けさうだ」と「トム」の腕に縋り付いて、其肩に涙だけらの頬を載せて、啜り上げ／＼泣き入つて居る。

「トム」は其を振り放して、立ち止まつてキツパリと、

「マギさん、まあ御聴き！僕は良い兄さんでせう。」

マ「エッエッエッ」と「マギー」は吃逆り上げな

がら答へる。

ト「此學期中釣糸の事を考へてゐて、よく御金を溜めて御菓子を買ふ仲間にも入らないでゐるから「スバウンサー」が僕と喧嘩までしたでせう。

「マ「エツエツ！其だから、兄さんをダ、ダ、ダイ好きなのよ。」

ト「其でもまあさんは不良い子なのです。此前の休暇の時には、僕の御菓子の箱の繪具を嘗めて落して仕舞つたし、其又前の休暇には、僕が釣糸の番をしてゐて呉れといふのに、其をポットに曳きづつて行かせたり、僕の紙鳶に用もないのに頭を突き入れて、破いて仕舞つたではありませんか。

マ「態としたのではないの。ついだワ。」

ト「ついではない！自分の爲て居る事にチャンと氣を付けて居れば、其様な事はありはしない。いけない子だもの、明日一所に釣りに連れて行って上げない。」

と恐ろしい結着をつけて、「トム」は「マギー」を捨て、走り去つた。

「マギー」は、一二分間は啜り泣きながら身動きもせず佇んでゐたが、急に踵を回らして一散に家へ駆け込んで、屋根裏の物置きへと入つた。此處で床の上に坐つて、虫蝕だらけの棚に頭を倚らせて遣瀨のない嘆きに暮れた。兄さんが學校から歸省してさぞ嬉しかろうと思つたに、兄さんは實に非道い！兄さんが可愛がつて下さらなければ、何も楽しみもない！あゝ兄さんは酷い！自分は御金を上げますといふのに、而して申譯がないといつて詫びるのに！自分は、母さんには腕白をいふが、兄さんに腕白をした事はない……腕白をするつもりは嘗てない！兄さんは非道いと物置のガラんとした空間に響く反響に一種の快味を覺えて、聲を立て、泣いた。

やがて「マギー」は物置きに數時間も籠つて居た氣がして、もう夕飯の時刻だろうに、皆が夕飯を

食べてゐて、自分の事を思ひ出して呉れぬの知らん。其れならば構はない。此處にゐて餓死するから。桶の蔭にひそんで夜通し此處に居てやろう。すると皆が騒いで兄さんだつて後悔するだろうと。桶の後ろへ潜り込みながら意地強く考へた。だが又暫時して、皆は自分が此處に居るのを、平氣で居るかと思つて涙が出始めた。今兄さんの處へ下りて行つたら、勘忍して下さるだろうか。御父さんが傍に御在で、大方自分の味方になつて下さるだろう。であるが、兄さんが自分を可愛いと思つて勘辨して呉れるのではなくては厭だ。御父さんに云付けられて、勘辨するのなら詰らない。止さうと、兄さんが迎に來て呉れる迄は下へは行くまい。と此の決心も桶の蔭で、眞暗な五分間位だけ非常の力で繼續したが、「マギー」の性質にとつて最入用な、人に可愛いがらきたいとの念が、その傲慢心と相撲を始めて、とうとう愛を欲する念が勝利を占めた。「マギー」は桶の後ろから、物置

きの薄明るみへと這ひ出した途端に、階段を足早に上つて來る足音を耳にした。

「トム」は「ルーク」を相手に話をしたり、構への周圍を廻つて見たり、好き勝手に歩き散したり、唯譯もなく木片を削つて見たり、其や之やに心を奪はれて「マギー」の事も、怒られて「マギー」が如何したろうとも思はないで居た。「トム」は「マギー」を懲らしてやる積りで、懲らすといふ仕事が終われば、自分は他の用事をするといふ如何にも實際家であつた。併し夕飯に呼ばれて入つていつた時に、父は「オヤ！あの子は何處にゐる」と聞き、母も同時に「お前の妹はどうおしたへ」と尋ねた。——兩親は、兄妹二人今まで一所にゐるものとのみ思つてゐた。

「僕知りません。」と「トム」は云つた。「マギー」に立腹はして居ても、告げ口をする氣はなかつた。「トム」は義ある男兒であつたから。

父「何！先刻からお前と一所に遊んでゐたのでは

ないか。あの子はお前の歸つて來るのばかり、
樂んでゐるのに。」

母「ソレヤ大變だ！きつと川へ落ちたのですよ」
と母親は坐を立つて、窓へと飛んでいつた。「ど
うしてお前はそんな事をさせて御呉れだろう」
と狼狽へた婦人の常で、覺えもない人に、分り
もせぬ事を咎め立てしてゐる。

父「イヤ／＼溺死なんぞするものか。トム！お前
が苦めたのだナ。」

ト「お父さん。僕は責めはしません。全くです。
家の中に居るのでせうよ。」と「トム」は激してい
ふ。

母「大方物置きだろう。黙つたり、獨言をいつた
りして、御飯時も何も忘れてゐるのだから。」

父「トム！いつて連れて來てやれ」と詞鋭く父は
云つた。炯眼かはた「マギー」を秘藏に思ふ心根
からか、父は「トム」があの子に辛く當つたの
で、さもなくば「マギー」が兄の傍を離れる筈は

ないと鑒定した。「親切にしてやれよ。分つた
か。さもないと了見があるぞ。」

「トム」は父親が專斷な權柄な人なのを知つて
ゐるから、父の命には背いた事はなかつた。が不
平な顔をして、葡萄入の御菓子を携へて出ていつ
た。「トム」は「マギー」の罰を緩めてやろうなどの
氣は更にないので、「マギー」が情ない目に遭ふの
は當然至極だと心得てゐる。

「マギー」が可愛がつて欲しさに思ひ餘つて、
驕りの心を抑へて、今や泣き腫した眼にも、亂れ
た髪にも頓着なく、哀を乞ひに下りてゆかうとし
た時に、階段に聞こえたのは正しく「トム」の足音
であつたのだ。「マギー」は「トム」の足音を知つて
ゐるので、遽に嬉しさに先胸を轟かせる。「トム」
は唯階段を上りきつた處に佇立して、「まあさん、
下りて御出でとさ」と云つたぎりであつたが、「マ
ギー」は走り出て、兄の首筋にからみ付いて啜び
泣きながら「兄さん！勘忍して！私堪らないワ！

之から氣を付けるから…物忘れしないやうに…御願ひだからやさしくして…ネーどうか兄さん」と云ふので「トム」の心にも、「マギー」の撫愛に感應するやさしい心の糸がないでもないから、「マギー」を相當に懲らしてとの最前の決心も弱つて、我にもあらず「マギー」に頬すりして、「まあチャン。もう泣くのを御止しネ……さ……この御菓子を少し御上り。」

「マギー」の泣くのも少し静まつて、やがて口を差し伸べて一口食べた。「トム」も御愛想に一口食ひかいて、互に頬を擦り鼻を突き合せて、彼れ一口我一口と食べるのであつた。其も盡きて「トム」が「ゆかうまあチャン御夕飯に」と誘つた。之で悲しかつた此日も果てたのである。

翌朝「マギー」は片手に自分の釣竿を、片手に籠を下げて出かけた。得意の技術を現して例の通り路の一番悪い處を悪るい處をと歩いてゐたが、當人は「トム」がやさしくして呉れる嬉しさに、

帽子の下から笑顔を見せてゐた。而して「トム」に釣鉤に餌を付けて呉れるやうにと頼んでしまつた。兄は餌にする蟲は感覺が無いものだといふから、眞實だとは思ふが、やはり手に觸れたくは無かつたのである。「トム」は餌だの魚だの何かをよく知つてゐて、どの鳥は害をするとか、海老錠はどうして明けるものとか、門の取手はどつちへ振る者だとか心得て居るので、其が「マギー」の目からは驚嘆すべき智識で、「トム」の立ち優つてゐるのが恐ろしかつた。而して「マギー」の知つてゐる事を下らないと酷評して、利口だなどと頌めて呉れぬのは、實際兄一人であつた。「トム」は又「マギー」を、思かしい子だと思つてゐた。女の子は一體皆愚物で、物に當る様に石を投げる術も知らず、「ナイフ」の使ひ道も分らず、而して蛙なんかを恐がる厄介者だと思つた。併し妹の「マギー」は可愛いので、一生涯面倒を見てやつて、自分の家を取締をさせて而して不都合な事をしたらば、罰し

てやろうと考へてゐた。

今二人は、丸池とて昔洪水の時に出来たといふ池へと、指して行くのであつた。此池は測り知られぬ程深く、その形はほと／＼圓形をなしてゐた。周圍には柳の樹や丈の高い葦が取り巻いてゐて、よく／＼水の縁に近よらなくては、水面は見られぬのであつた。此處は「トム」の大好きな遊び場で、此處へ來るといつも上機嫌であつた。今も大切の籠を明けて、釣道具を支度をしながら、何くれと睦しく「マギー」に囁き／＼、「マギー」の釣糸を投げ入れてやつて、その手に竿を持たせてやつた。「マギー」は自分の釣に、小魚が掛つて、「トム」には大きいのが掛る事だと思つてゐるが、其の内に魚の事も何も忘つてしまつて、鏡の如き水面を夢心地に眺めて居ると、「トム」は囁く聲に力を籠めて、「まあさん御覽！御覽！」といつて「マギー」が糸を引放さうとするのを止めさせやうと走つて來た。

「マギー」は、例の如くまた何か不始末を仕出したかと、愕然としたが、さうではなくて、「トム」が糸を引上げて呉れると思つたら、大きな鯉が一尾草の上に跳ねた。「トム」は夢中で「まあちゃんよい子！大出來！籠を空にして御呉れ」と怒鳴つた。

「マギー」は格別手柄をしたとも自覺しなかつたが、「トム」が「まあちゃん」と呼んで呉れて御機嫌なのが嬉しかつた。「マギー」の心では、叱られるといふ事がなくて、この寂寞の中にじつと坐つて、水面に上つて來る魚の軽い音や、柳の木や葦が水と内所話をしてゐるやうなサヤ／＼いふ音を聞いてゐるのは、極樂のやうだと思つて居たので、魚が掛かつて「トム」が知らせて呉れるまでは氣も付かなかつた。それで居て、「マギー」は釣りは大好きだといつてゐた。(つづく)